Ⅶ. THE DEMOCRATIC CONCEPTION IN EDUCATION

教育に関する民主的な考え

Ⅷ. AIMS IN EDUCATION

教育の諸目的

Ⅸ.　NATURAL DEVELOPMENT AND SOCIAL EFFICIENCY AS AIMS

目的としての自然発達と社会的に有為な力

発表日：2015年10月21日

発表者：礒野・井上・高橋・寺尾・原・本村

【流れ】

第7章　教育に関する民主的な考え

1.　人間の共同生活の意味　　　　　　　　4.　18世紀の「個人主義的」理想

2.　民主的な理想　　　　　　　　　　　　5.　国家的な教育と社会的な教育

3.　プラトンの教育哲学

第8章　教育の目的

1.　目的aimの本質

2.　良い目的aimsの判定基準

3.　教育への応用

第9章　目的としての自然発達と社会的に有為な力

1.　目的を与えるものとしての自然

2.　目的としての社会的有能さ

3.　目的としての教養

【対訳表】

aim(s) 目的　　　　　　　　　　　　　　the spontaneous development 自発的発達

end(s) 目的、結末

result(s) 結果

social efficiency 社会的有能さ

culture　教養

**●　Ch.Ⅶ THE DEMOCRATIC CONCEPTION IN EDUCATION**

**：教育に関する民主的な考え　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(pp.77-96)**

担当：井上

**■1. The Implications of Human Association..：人間の共同体の意味　　　(pp.77-82)**

「社会」とは…①共有の関心を持った集団

②他集団との自由な相互作用があること

(1)「社会」はいくつかの小規模な集団（ex）政党、派閥、犯罪組織等）の集まり

　　　　であり、小規模集団は、あらゆる目的のために、様々なやり方で結びつく

(2)「社会」は、その本質（目的、福利の共有・公的目的への忠誠・人々相互の同情心）によって１つのものと考えられる。社会を構成する小規模集団は、それぞれに、「社会」の特質を有するが、その特徴は様々である。また、各集団によって行われる教育は、集団の構成員を社会化する役割を持つが、その社会化の質や価値は、その集団の持つ習慣や目標によって変わってくる

(2)(3)より、社会生活の様式の価値を測る基準が必要になる。

基準①意識的に共有している関心の量がどれくらいで、どれくらい多様なのか

基準②他の集団との相互作用が、どれくらい充実していて、自由なものか

Ⅰ.専制政治の例

→・多数の価値を共有するためには、集団の成員全員が、お互いに受信、吸収する平等な機会があるこ

　　とが必要

　 ・相互交渉の欠如は、刺激のあり方を望ましくないものにする

Ⅱ.第２の論点

　　集団が孤立し、他集団との相互作用がない（すなわち、他集団との関係性によって、自己を改革、

　　進歩させることではなく、すでに持っているものを固守することを目的としている）

　→・反社会的気風を見せる

　　・生活の硬直や形式的制度化を助長する

**■2. The Democratic Ideal.：民主的な理想 　　　　　　　　　　　　　　(pp.82-84)**

(1)判断基準の２つの要素（共有の関心、相互作用）は民主主義を指向する

1. 共同の関心が、より多くの、多様な事柄に向けられるだけではなく、社会統制の１つに共有の関心があることで、さらなる信頼感につながる
2. 相互に自由な交流があることによって、社会習慣に変化が生じる

(2)教育において

注目点：様々な関心が相互に浸透しあっていて、社会の進歩こそが、考慮すべき重要な問題として捉えられるような社会生活実現のために、民主的共同社会は、他の共同社会よりも、計画的かつ組織的な教育に関心を示す

・民主主義社会は、教育に対する熱意を持つ　　なぜなら…

・自分たちの統治者を選挙し、それに従う国民を教育しておかなければ、普通選挙による政治

　　　　　が上手くいかない

・民主主義は単なる政治形態ではなく、共同生活の一様式であり、連帯的共同経験の一様式で

　ある

　　民主主義によって、階級的、民族的、国土的障壁が取り除かれることにより、相互交流が活発になる。これによって、人々が反応するべき刺激が増加し、その結果、人々の行動の変化が助長される

担当：原

**■3. The Platonic Educational Philosophy　プラトンの教育哲学　　　　　（pp.84-87）**

◆教育の任務とは…(p.84 l.13、p.87 l.3)

→安定した社会のために、生まれつき適性のある仕事をなすために、その適性を発見し、訓練すること

◆プラトンの出発点(p.84 最後の段落)

社会の組織は究極的には存在の目的を知ることによって決まる

しかし、私たちは目的(＝善)を知らない

→判断基準も持たない

→諸活動の訂正な限界と配分（＝プラトンにとっての正義）を、個人および社会組織の両方の特性として理解できない

→どのようにして、善の認識に達しうる？

→秩序の乱れた党派的な社会は異なった規範や基準を設定する

→この情況の下では個人が矛盾のない整合的な精神状態に達することは不可能

結論

教育は、制度や慣習や法律によって与えられる範型から生ずる

◆プラトンの出口(p.85 l.20)

真の存在の正しい範型…知恵（真理）を愛する人々が、学問することによって知ることができる

→有力な統治者が国家を形成したならば、人々が何に役立つかを発見し、各人をそれぞれが生まれつき適している生涯の仕事に割り当てる方法を設定して、人々をふるい分ける教育を行うことができる

→各人が自分自身の本分を行い、その分を超えないなら、全体の秩序と統一は維持される

ここまでのまとめ

プラトンの哲学思想は、社会秩序の教育的意義・社会秩序が若者たちを教育するのに用いられた方法に依存していることの2つを一番認識している。

◆プラトンの考える社会と個人(p.85-86)

・社会における個人の地位は、家柄や財産などの因襲的身分によってではなく、教育の過程で発見されたその人自身の天性によって決められるべきである

→しかし、個人の独自性を全く認めなかった。

・諸個人は、生まれつき、非常に少数の階級に分類されるものであり、個人の素質には三つの型の能力や才能があるに過ぎない

→教育は、それぞれの階級において、多様性のみが変化や進歩を創り出すため、固定した限界に達することになる

◆正しい教育は、理想国が出現するまでに、現れることができない

真の実在は恒常不変と考え、それ以後変化の起こらない国家を作るために、根本的に変革しようとした

※教育を改良し続けることがよりよい社会をもたらすとプラトンは信じられなかった。

教育は理想国の維持のためであり、その実現のためには、哲学的英知とその国の支配権の掌握との偶然の一致をもたらす何かが必要。

**■4. The “Individualistic” Ideal of the Eighteenth Century　18世紀の「個人主義的」理想（pp.87-89）**

18世紀の哲学では、非常に異なった観念の世界が展開されている。

◆自然と教育(p.87 l.23-25)

「自然」は、現存する社会体制に反立する何かを意味する

→プラトンはルソーに大きな影響を及ぼした

自然と合致する教育が、教授と訓練の目標と方法を与える

自然のままの本来の天性は、非社会的・反社会的なものと考えられた

◆積極的理想である全人類の社会(p.88 l.3)

人間の力は、その国家の支配者の要求と利己的関心を満たすために妨げられ、ゆがめられている

→極端な個人主義は、人間を完成していくことができる理想および人類全体同様の広範囲な社会体制という理想の片割れであり、その裏面

「自然」を思い切り自由に活動させること＝人為的模範

◆自然に合致した教育こそ社会的な社会を確立する第一歩(p.88 l.31)

自然の事物の世界は調和した「真理」の舞台であるから、この教育は真理で満たされた精神を生み出す

**■5. Education as National and as Social　国家的な教育と社会的な教育（pp.89-91）**

自由への情熱がさめると、4であげた理論の弱点が明らかになった。(p.89 l.11)

→あらゆることを自然にゆだねるだけでは、教育そのものの否定になる

→偶然の出来事を当てにしているだけ

◆明確な組織の必要性(p.89 l.16)

「すべての能力の完全な、しかも調和的な発達」の実現には明確な組織が必要。ペスタロッチ：実験を試み、富と力をもち博愛主義的傾向をもつ人々に自分の例に習うことを勧めることができた

→しかしペスタロッチさえも教育の理想を効果的に追求するには、国家の援助が必要であると認めた

◆個人主義の勢力減退、国家主義の台頭(p.90 l.11)

・ヨーロッパにおいて「国家」が人類に代わって登場し、世界主義は国家主義に屈服。「人間」を形成することではなく公民を形成することが教育の目標

→個人主義の理論は勢力を失う

・国家は、「教育の過程とは、個々の人格の発達過程というよりもむしろ、規律的訓練の過程」であるとした

・教育哲学は上記の二つの観念を調和させようとした

→結果、国家の「有機体的」性格という概念の形をとった

◆カントの教育哲学(p.91 l.21)

・「教育＝人間が人間になる過程」と定義

・人類は自然の中に埋もれた状態でその歴史をはじめる

→真に人間的な生命の特質は、人間は自分自身の自発的努力によって創造しなければならない

→この創造的努力は、ゆっくりと進行する、いく世代もの教育活動によって行われる

・人間は自分自身を真に道徳的で理性的で自由な存在にしなければならない

◆困難(p.91 l.32)

各世代は正しい教育(人間性を人間性として可能な限り最も良く実現することを助長すること)を目指さないで現在の世の中でうまくやっていけるように子供たちを教育しがちである。

担当：寺尾

◆誰が、人間性が向上するように教育を運営するのか（p.91, l.38）

→啓発された人々の私人としての努力に頼り、教育を運営しなければならない

※支配者たちは、人類にとって最善なことではなく、自分自身の国の繁栄に興味をもつ(p.92, l.8～)

⇒18世紀　個人主義的世界同胞主義の特徴

　個人の人格の十分な発達が全体としての人類の目標、進歩の観念と同一視されている

→国家による運営・統制される教育への危惧も認められる

結論　「個人的教育観」、「社会的教育観」という言葉は、一般的な意味や文脈から離れた意味で捉えたら無意味である(p.92, l.32～)

◇プラトン：（教育の理想）個の実現＝社会の統一・安定 ⇔ 「重層的階級社会」に制約

◇18世紀：「個人主義的」←人類全体を包む大きな組織・社会が理想

◇19世紀：個人的人格の実現←民族国家→全人類的社会の実現

⇒教育は社会的過程であり機能であるという教育の概念は、社会がどういうものかを限定するまで明確な意味を持たない

◆民主的社会における民主的社会のための教育の根本問題は、国家的目標と社会的目標との衝突からおこる(p.93, l.16～)

教育の社会的目標と国家的目標が同一視され、その結果社会的目標の意味が著しく曖昧になる

◆教育制度が、民族国家に運営され、教育課程の社会的諸目的が制限されず堕落しないことが可能か(p.94 l.8～)

　◇内的課題：社会が階級に分裂、ある階級が他の階級のより高い文化のための道具にされる傾向

　◇外的課題：国民的忠誠心や愛国心←共通目的→国家の政治的境界線を越えた人々

→学校施設を拡充、経済的不平等を妨げる、将来必要な知識や技能を平等に習得させる、さらに若者がそれらを身につけるまで教育の影響下に引きとめるためのさまざまな施策が必要

◆地理的な制限を超えて、協力的な人間の営為と成果において、人々を結びつけるものはすべて強調しなければならない(p.95, l.1)

⇒社会的目標に向かって次第に成長するうちに個人の能力を自由にしていくという教育観そのもの

**●　Ch.Ⅷ AIMS IN EDUCATION：教育の諸目的　　　　　　　　　　　　　(pp.96-106)**

**■1. The Nature of an Aim.：目的aimの本質　　　　　　　　　　　　　　 (pp.96-99)**

◆教育の目的：人々が自分たちの教育を続けていくことができるようにすること

→この考えが社会のすべての成員にあてはまるのは

・人と人との交わりが相互に行われている場合

・公平に行きわたった関心から生ずる多方面への刺激によって社会を改造するための用意がある場合

＝民主的な社会

⇒　※教育過程の外にある、教育を支配する目的を追求するのではない

　単なる結果resultsを目的endsと対比することによって目的aimの本質を明らかにする

◆目的aimsは常に結果resultsに関係する(p.97 l.24)

　目的aim：整然と順序づけられた活動、ある過程を次第に完成していくという秩序をもった活動

　→結末endを前もって予見することを意味する

◆予見された結末としての目的は、活動に方向を与える(p.98 l.5)

　予見は3つの点で機能する

　①結末に達するための必要な手段を知り、邪魔になる障害を見つけるために状況を注意深く観察する

　②いろいろな手段を用いる正しい順序、前後関連を示唆する

　③さまざまなやり方からどれか一つを選択することを可能にする

　→これらは相互に密接に関連している

結論　目的をもって行動することは理知的に行動することと全く同じことである(p.99 l.1)

　行為の終着点を予見＝対象と自身の能力を観察、選択、配列＝意思をもつ

　⇒理知的であるためには、活動の計画を立てるにあたって、「立ち止まり、目を凝らし、耳を澄まさ」なければならない

◇目的aimの価値を明らかにするには、目的をもって行動することと理知的な活動とを同一視すれば十分である(p.99 l.25)

担当：高橋

**■2. The criteria of Good Aims.：良い目的であることの判断基準　　　　　(pp.99-102)**

(1) 設定される目的は、**現在の状況が自然と発達したもの**でなければならない。(p.100, l.1)

・進行中の出来事を考慮し、その状況における方策や困難に基づくものでなければならない。

(2) 状況に合うように変更できるような**柔軟なもの**でなければならない。(p.100, l.16)

・行動することでそれまで見落とされていた目的の必要条件が明らかになり、最初の目的を修正することが必要になるため。

・良い目的とは実験的であり、だから行動において試されつつも常に成長していくもの。

(3)　つねに**活動の解放**を意味するものでなければならない。(p.101, l.9)

・対象は活動を方向づける手段

・活動の解放＝対象は活動的目的に達する一つの段階に過ぎない。

　Ex. ウサギを撃つこと

・方向づける計画として活動内で生ずる目的は、つねに目的であり手段である。 (手段は達成されるまでの一時的な目的であり、目的は達成されるとすぐにさらなる活動をするための手段となるため)

　・手段と目的が分離すると、活動の重要性を減らし、単調で機械的で嫌な骨折り仕事になる。

Ex. 農家：植物や動物を愛するか否かで、活動の全過程がそれぞれ独自の価値を持つか否かが決まる。

**■3. Applications in Education.：教育への応用　　　　　　　　　　　　(pp.102-106)**

・良い教育の目的にみられる特徴

1. 教育の目的は、教育される**個人に本来備わっている活動と要求**(生まれつきの本能や獲得された習慣)に基づいていなければならない。(p.103 l.29)
2. 教育の目的は、教授される**個人の活動に協力する方法に転換する**ことのできるものでなければならない。(p.104, l.14)

・能力を解放し、系統的に作り上げるために必要な環境を示唆する。

・しかしその環境が、特定の手順を構成しなかったり、それらの手順が検証し、修正し、拡充しないなら、その目的に価値はない。

1. 教育者は、**一般的で究極的だと断言されている目的に対して警戒**しなければならない。(p.105, l.6)

・一般的であることは抽象的であることと同じで、特定の状況から切り離されてしまうため、手段から切り離された目的のために準備するという教授と学習の関係になってしまう。

**●　Ch.Ⅸ NATURAL DEVELOPMENT AND SOCIAL EFFICEINCY AS AIMS**

**：目的としての自然発達と社会的有能さ　　　　　　　　　　　　　　　　　(pp.106-119)**

担当：礒野

◆目的を述べるということ…ある一定の時代における強調の問題。

例：権力によって支配されている時代は、大きな個人的自由を求める声を呼び起こす

　　個々人が無秩序に活動する時代は、教育目的として社会統制の必要を呼び起こす

⇒実際に行われている暗黙の慣行と言明された目的はこのように釣り合いを保っている。

　以下では、近代において影響力のあった３つの説を取り上げていく。

**■1. Nature as Supplying the Aim.：目的を与えるものとしての自然　　(pp.106-113)**

1. 教育とは自然に合致する発達の過程であるという考え(ルソーの説)(p.107)

これまでの教育改革者ら学校教育の方法の因襲性や不自然さに嫌気がさし、自然を規範そして発達の法則や目的を与えるものとして自然に従い同調することが務めだ、とする傾向があった。

BUT予見し目論見を立てるために知性を建設的に使用することは無視され、人間は邪魔にならないように退き自然を活動するままに任せればよいことになる。

ルソー『我々は三つの源泉(自然、人間、事物)から教育を受ける』と提言。

教育的発達の三つの要因

（a）我々の身体の諸器官の生まれつきの構造とそれらの機関の機能的活動

（b）これらの器官の活動が他の人々の影響の下で利用されること

（c）それらと環境との直接的相互作用

また同様に(a)教育の三つの要因が一致して協力しあっているときにだけ、個人の十全な発達が起こり（b）諸機関の生まれつきの活動は本来的なものであるから、調和を考える時の基礎となると主張。

デューイ本能を放っておいてそれら自体の「自発的発達」を行わせることでなく、それらを組織する環境を用意するということに教訓がある。しかし、目的としての自然発達は身体の諸器官に注意し注健康と活力の必要に注目させた結果「自然」という語が教育の有効性には必要条件があることを示し、ルソーが自然的発達を目的としたことで教育上の慣行に革命的な変化が引き起こされた。

1. 自然的発達という目的は身体的運動性の尊重という目的に言い換えることが出来る。自然に従うという目的は身体の諸器官を使用することが果たす実際的役割に注目すること。
2. 一般的目的は子どもたちの個人的差異の尊重という目的に言い換えられる。自然に従うという目的は好みや興味の発生や増大現象に注意を向けさせることである。諸能力は不揃いに発芽し開花する。児童期の初期の諸傾向の取り扱い方によって基本的な性向が固定され、後に現れる諸能力の取る傾向が条件づけられる。＊Donaldoson の引用

「自然に従う」という考えの初期の歴史が、2つの要素を結びつけた。

⇒ルソー以前教育には無限の力があると考え全ての人間の本質的平等と全人間を同じ水準に高められる可能性を説明。直接的な教育的努力によってもたらされる養育や、修正や変質の意義は大きいが自然（学習）によらない生得の能力が養育の基礎と基本手段を与える。

ルソー自然は単に成長を開始させる最初の力を与えるだけでなく成長の計画や目的をも与える。

⇔デューイ環境から離れて教育することではなく、生まれつきの諸能力がよりよく利用されるような環境を用意すること。

担当：本村

**■2. Social Efficiency as Aim.：目的としての社会的有能さ　　　　　　　　　　　(pp.113-116)**

・社会的な有能さは、消極的な強制によってではなく、社会的に意味をもつ仕事の中で、生まれつきの能力を積極的に使用することによって、獲得される。

(1)目的：産業上の有能さ（p.114, l.19）

・寡頭政治社会から民主主義社会へ変化するとともに、出世し資産を有益に管理する能力を身につけさせる教育の意義が強調されるのは当然。

BUTこの目的には、現存する経済の条件や基準が究極的なものであると受け入れられてしまうという重大な危険あり。（p.114, l.39）

→民主主義的な規準は、自分のキャリアを選び、立身出世できるまで能力を発達させることを私たちに要求している。

◆不当な特権や不当な剥奪〈不公平〉を永続させるのではなく、それらの矯正に貢献することが進歩的教育の目的。

(2)目的：市民的有能さ（p.115, l.26）

・人や政策を賢明に審査し、法に従うのはもちろんのこと、法の制定にも参加する能力をもつこと。

・長所…あてもなく能力を訓練することから私たちを守り、能力は何かをすることと関連していて、最も必要なことは他者との関係を含むことであると注意を促すこと。

BUT 目的を狭く理解しないように用心が必要！（p.115, I.39）

〈科学者たちの発見の排除（p.116, l.1～）〉

◆社会的な有能さとは、経験のやり取りをする能力であり、最も広い意味では経験をより伝えやすいものにすること。

**■3. Culture as Aim.：目的としての教養　　　　　　　　　　　　　　　　(pp.116-118)**

教養（人格の高い価値） ←―――→ 社会的な有能さ

・この対立は、厳格な区分をもつ封建的社会の産物である。

　上位の人…人間として発達するための時間と機会をもつ

　下位の人…外面的な生産物を供給することに制限されている

BUT民主主義社会では、 （p.117, l.23）

　①全ての人が社会的へのリターン（返礼）をすべき

　②全ての人に特有の能力を発達させる機会を与えるべき

⇒社会的有能さと教養が敵対するのではなく、同じことを意味するようになるために努力することが教育の課題。

【論点】

デューイは現代における教育の特有の課題として、社会的有能さと人格的教養とが敵対するものとならずに、同じことを意味する目的のために努力することを掲げている。

**現代の日本において、社会的有能さと人格的教養は同じことを意味する目的を目指しているだろうか？**

できていると考える場合、その理由と具体例を、できていないと考える場合はその理由と今後の対策はどのようなものが挙げられるかだろう？

【教育目的の捉え方】

* 二元的対立　自己犠牲と精神的自己完成という２つの理想を強調(p.118 l.19)

　　　　社会的有能さ　＝　他の人々に対しての外面的奉仕

　　　　人格的教養　　＝　精神的自己完成

* デューイ　社会的有能さと人格的教養が同じことを意味する目的を目指す

　　　　　社会的有能さ　＝　経験をやり取りする能力、共同活動に十分に参加する能力

**目的**

人格的教養　＝　意味の認識の範囲を拡大し正確さを増していく能力

【本文中の記述】

＜社会的有能さ＞

* It must be borne in mind that ultimately social efficiency means neither more nor less than capacity to share in a give and take of experience. (p.116 l.5)

In the broadest sense, social efficiency is nothing less than that socialization of mind which is actively concerned in making experiences more communicable. (p.116 l.14)

⇒社会的な有能さとは、**経験のやり取りをする能力**であり、最も広い意味では経験をより伝えやすいものにすることである

* But social effluence as an educational purpose should mean cultivation of power to join freely and fully in shared or common activities. (p.119 l.9)

⇒教育目的としての社会的有能さは、**共同の活動に十分に参加する力を育成する**こと

＜教養＞

* Culture means at least something cultivated, something ripened. (p.116 l.37)

Culture is also something personal; it is cultivation with respect to appreciation of ideas and art and broad human interests. (p.116 l.40)

⇒教養とは、**人格的なもの**であり、**広い範囲にわたる人間の関心ごとについて洗練している**こと

* And there is perhaps no better definition of culture than that it is the capacity for constantly expanding in range and accuracy one’s perception of meanings. (p.119 l.16)

⇒教養とは、絶え間なく、**意味の認識の範囲を拡大し正確さを増していく能力**である

＜教育の目的＞

* The dualism is too deeply established to be easily overthrown; for that reason, it is the particular task of education at the present time to struggle in behalf of an aim in which social efficiency and personal culture are synonyms instead of antagonists, (p.118 l.23)

⇒**社会的有能さと人格的教養とが敵対するものとならずに、同じことを意味するものとなるような目的のために努力する**ことが現代教育特有の課題である。

* For how can there be a society really worth serving unless it is constituted of individuals of significant personal qualities? (p.117 l.12)

This is impossible without culture, while it brings a reward in culture, because one cannot share in intercourse with others without learning …. (p.119 l.13)

⇒**有意義な人格的性質をもっている個人によって構成されている社会**でなければ、貢献するに値する社会はない。**教養がなければ（社会的有能さを育成することは）不可能**であり、それ（社会的有能さを育成すること）は教養の向上に役立つ。